

## ストレスと糖尿病

井口昭久

大学の構内にある桜が満開である。古い学生たちが巣立って新しい学生が入ってくる。若者たちが入れ替わる。

私は学園の片隅のクリニックで古くからの患者たちと会っている。古い彼らは入れ替わらない。長いお付き合いが続く。

「女房が早く死ねたっていうんですよ」と82歳になる森さんが言った。この頃、彼は私の前に座ると毎回同じことを言う。

私の外来に通うようになってから30年を超える。糖尿病である。長年の罹患にもかかわらず合併症は出現していない。視力も聴力も衰えていない。

同じ時代を生きてきたので、彼は私の辿ってきた人生にも詳しい。

30年前に私は港の近くの診療所に半日勤務していた。

それまでは山崎豊子の書いた小説の「白い巨塔」などによって医学部教授は多くの副収入が入る職業だと思われていた。私もそう思って教授になった。

しかし私が教授になった頃から医学部教授の持つていた様々な特権がジャナーリズムで騒がれるようになって次々と剥奪されていった。副収入の入らない教授の給料は僅かなものだった。自分の小遣いを稼ぐためにアルバ

イトに行かなければならなかった。

森さんとはその頃からのお付き合いである。彼が会社勤めをしていた頃はストレスが多かったようだった。頑固な性格であったので妻との間のトラブルも絶えなかった。

ストレスのためか、糖尿病のコントロールは良くなかった。

19世紀までは糖尿病の原因は脳にあるのではないかと考えられていた。夫婦の離別、離婚などのストレスによって糖尿病が発症したとする症例が多数報告されていたからであった。犬の脳に針を刺すと尿糖が出現するといった実験結果も、糖尿病の発症に脳が関わっているという説を裏付けていた。しかし20世紀の初頭に糖尿病はインスリンの作用不足による病気であることが分かった。それからはこの学説を唱える人はいなくなった。

しかし今でもストレスが引き金になって糖尿病が発症する例は多い。

また夫婦の間のトラブルが糖尿病を悪化さ

せることには変わりはない。

森さんが定年になって妻と二人だけの生活が20年続いている。最近の森さんの糖尿病は安定しているから、彼が言うほどに妻との関係が悪いわけではないらしい。

「妻が言うんですよ。あなたが死んで、しばらくは、しょぼんとしていると思うけど、その後はルンルンよって。死んだら食卓を半分にするって。平均寿命を過ぎると皆そうですよ」

そしてニコニコして私に向かって言った。「先生もそう言われるようになりますよ」

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)

